

わたしは門です ヨハネによる福音書 10:1-6

1. 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。(10:1-3)
 - a. 「まことに、まことに」はその前に起きたことを要約してイエスが重要な真理を教える際の常套句(じょうとうく)である。この言葉は前の章で起きたことを引き継いでおり、よく知られている「わたしは門です」と「わたしは良い牧者です」のイントロとなっている。
 - b. 9章では盲人の癒しがあった。それは皆が喜ぶべき奇蹟だと思われるかもしれないが、宗教指導者たちにとってはそうではなかった。イエスはすでに彼らの律法主義を糾弾していたため反感を買っており、彼らは奇蹟(神の国到来のしるしの一つだと考えられていた)を喜ぶどころか元盲人を会堂の外に追放してしまった。
 - c. ユダヤの宗教指導者たちはイエスに腹を立て、9章は彼らは盲目だというイエスの告発で終わる。そしてイエスはこのたとえによりいかに彼らが盲目であることを教えようとされた。
 - d. このたとえでは、囲いの中の羊は神を忍耐強く待つ信仰のある者。神の民を盗み、殺し、滅ぼそうとする盗人や強盗がいたとイエスは言われた。現代でもその動機が自己中心的だったり、利己的だったり、見当違いだったり邪悪だったりする人がいる。私たちが生きるこの世の中は傷ついている人たちも多くいるが悪い人もいる。それらを見分けるにはどうしたらよいだろうか？
 - e. 前の章では宗教指導者の仮面をかぶった人たちが神の民を間違った方向に導いていた。「ユダヤ人」と自称する人やパリサイ人は盲目だったため、イエスが安息日を守らなかったという理由でイエスがキリストだと認める人たちを追放した(イエスは安息日規定を破らなかったが彼らの都合の良いように解釈した)。
 - f. 羊の囲いに門から入らないでほかの所を乗り越えて盗み、殺し、滅ぼす者がいると言われていたが、それは誰で、門とは何だろうか？
 - g. イエスは羊の門である。イエスは野心、知識、縁故、権力、富、評判によって囲いを乗り越えたのではない。神ご自身によって任命され、門としてこの世にお生まれになった。参考までに、その時代の羊の囲いというのは必ずしも人によって作られ木の門が付いていたわけではない。狭い入口のある囲まれた空間で、羊飼いがその入口に寝て羊が野生の動物から襲われるのを守った。まさに羊のために自分の命をなげうっていたのである。
2. 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。(10:4-6)
 - a. イエスは、ご自分を通してでなければ父のもとに行くことはできないとおっしゃった。イエスはその後「わたしは道であり真理でありいのちです」と言われる。神の民が神を知る方法はイエスを通して以外にない。イエスが門である。終わりの日には人々を惑わす偽教師や偽預言者が多く現れるので注意が必要である。
 - b. 悪い人たちに気を付けるだけでなく、イエスの声を聞き分けられるようになることも大切である。単にみことばを知ることとイエスの声を聞くことには違いがある。イエスの羊は彼の声を聞き分けついて行く。